

ヘブル人への手紙2章1-3節 「こんなにすばらしい救い」

1A 御子について聞いたこと

1B 心に留めるみことば

1C 洪水の中の家

2C 試練の中の信仰

2B 押し流される危険

2A ないがしろにする厳しさ 2-3

1B 御使い以上の処罰

2B 偉大な救い

1C 「こんなにも」

2C 「すばらしい」

3C 「救い」

本文

ヘブル人への手紙 2 章を開いてください。私たちの聖書通読は、先週ヘブル人への手紙に入り、1 章を終えました。午後礼拝で 2 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、初めの 3 節に注目します。「¹ こういうわけで、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留め、押し流されないようにしなければなりません。² 御使いたちを通して語られたみことばに効力があり、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたのなら、³ こんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちはどうして処罰を逃れることができるでしょう。この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです。」

私たちは今朝、しっかりとみことばを心に留め、押し流されないようにすることを学んでいきます。世の中にある大きな流れがあるけれども、気づかずうちに流されて行って、戻って来れなくなることへの警告です。

みなさんは、夏の時期に海水浴をしますでしょうか？ 私たち夫婦は、今年の夏、千葉県の上総行幸宮町に行ってきました。私はそこで海水浴を楽しみました。毎年、残念なことに、何らかの形で水難事故が起こりますね。しかも、遠浅の海で水難事故が起こります。それは、離岸流(rip current)と言います。波は岸辺に押し寄せてきますから、突っ立っていれば、自然に岸辺に流されてきますね。けれども、離岸流はその逆で、海岸のある地点に入ると肉眼では見えない形で、逆に沖に一気に流れるところがあります。そこに入ると、足が着いているうちは流れを感じられますが、足を離れてちょっと浮いていると、自分が岸辺から遠ざかって、沖合の方に流れていることにさえ気づきません。このように、気づかずうちに押し流されているのです。

私たちの信仰についても、同じような危険があります。いつの間にか、押し流されているのです。私たちが信仰を捨てるとか、信仰から離れるということを知ると、ある時に意志をもって、きっぱりと信仰を捨てるように聞こえるかもしれませんが、多くは少しずつ、自分でも気づかないうちに起こります。ヘブル人への手紙は、まさに、信仰を持っていると言いながら、元のユダヤ教の生活に戻って行ったユダヤ人信者たちがいることを意識して書いた、手紙です。それが、いつの間にかやって来るのです。

1A 御子について聞いたこと

1B 心に留めるみことば

「**こういうわけで、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留め**」なさいと、ヘブル書の著者は言っています。聞いたことを、しっかりと心に留めるということ、これが自分が押し流されないための錨になるのです。6章19節にも、「**私たちが持っているこの希望は、安全で確かな、たましいの錨のようなものであり**」と言っています。押し流されないように、たましいの錨があるのです。

それが、1章で語っていたことです。覚えていますか、イエス様は、万物の相続者で、神の栄光の輝きであり、神の本質の現れです。この方は、神の御子であり、その王国は永遠で、天と地が過ぎ去っても、この方は変わらずにおられることが、書いてありました。主がいと高き方の右の座におられるのです。御使いは、力にすぎず栄光の輝きを持っていますが、御子は、はるかにすぐれた御名を持っておられます。

このように、主の栄光を仰ぎ見て、主をあがめて行く中で、その希望が押し流されないようになるのです。逆に言うと、この方をその栄光にふさわしく、私たちがあがめていなければ、押し流されてしまうということですね。私たちは、何もしていなければ、心の中でいつの間にか、イエス様が小さな存在になってしまいます。この方がどれほど大きな存在かははかり知ることができませんが、この方をあがめるのです。この方が神の右の座に着いておられるほど、高いところにおられるように、私たちもこの方の御名を高くかかげるのです。

そうすれば、その栄光の希望によって、私たちは押し流されなくなります。パウロが、ローマ人への手紙5章で、苦しみさえも喜んでいっている箇所がありますね。読んでみます、「5:2-4 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが、それだけではなく、苦難さえも喜んでいますが、それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」神の栄光にあずかる望みを喜んでい、と言っていますね。私たちは積極的に礼拝賛美の中で、主の栄光を見て、この栄光にあずかる望みを抱いています。こういうことをやっているからこそ、苦しみがあっても、その中で喜んでいただけるのです。

1C 洪水の中の家

そして、本文には、「**ますますしっかりと心に留め**」なさいと言っていますね。すでに心には留めていたのです。けれども、それだけでは足りず、**ますます**心に留めないと勧めています。これまで聞いてきたから、もう分っている。それに心を留めるほどでもないというような態度は禁物なのです。すでに聞いているみことばであっても、それをこれまで以上に、ますますしっかりと留めるのです。ペテロも第二の手紙で、次のように話しました。「1:5-8 だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、私たちの主イエス・キリストを知る点で、あなたがたが役に立たない者とか実を結ばない者になることはありません。」積極的に加えて行くのです。

どのように、みことばを聞くかについて、イエス様は、砂の上に建てた家と、岩の家に建てた家に喩えておられました。「マタ 7:24-27 ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもその倒れ方はひどいものでした。」イエス様のみことばを聞いて、それをしっかりと心に留めているのであれば、それは岩の上に家を建てていて、ただ聞いているだけであれば、砂の上に家を建てる愚かなことをしている、ということです。

2C 試練の中の信仰

私たちが、試練の中でもしっかりと信仰を働かせることで、主は私たちを成熟させてくださいます。「ヤコブ 1:2-4 私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。あなたがたが知っているとおりに、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」

2B 押し流される危険

改めて考えたいと思います、押し流されないようにする方法を今、見ました。では、逆に、押し流されるためにはどうすればよいのでしょうか？何もしないことです！前身していなければ、ただ立ち止まっていれば、実は後退しています。先ほどの離岸流の喩えにあるように、地に着いていれば流されていることは分かりますが、ただ浮かんでいるだけだと、流されていることさえ気づきません。しっかりと踏みとどまっていなければ、必ず流されているのです。

タラントの喩えを思い出してください。そこで一タラントを受け取った人の行動は、地の中に隠したということです。「マタ 25:25 それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の一タラントを地の中に

隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様の物です。」預かった一タラントは、その資金を運用しなければならなかったのです。ただ地に隠しているだけでは、だめだったのです。主人は、せめて、銀行で預金ぐらいすればよかったことを責めています。そう、少しでも、何とかして関わればよかったのです。それもしなかった。これが、何もしていない者の姿です。

押し流されていく多くの人は、自分はお金を持っていると思ひ込みます。一タラントを見て、だから私は天国に行けると思っています。自分はイエス様を信じる信仰告白をした。だから、大丈夫と思ひます。祈りも、食前に祈っているし、とか。けれども、その時のイエス様がすでに、いと高き所におられる方の右に座している方ではなく、日本人が自分のハンドバックに付けている、お守りと同じようにみなしていることに気づいていないのです。もう、聖書が啓示しているイエス様ではなく、違うイエス様を信じているのです。イエス様をイエス様としてあがめるためには、今、いるところからさらに前に進まないといけません。

2A ないがしろにする厳しさ 2-3

1B 御使い以上の処罰

そして2節と3節は、救いをないがしろにする事の処罰が書いてあります。「御使いたちを通して語られたみことばに効力があり、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けた」とありますが、これは、モーセの律法に違反した時の処罰です。午後礼拝で詳しく説明します。モーセの律法による処罰が、厳しいものであれば、ましてや、こんなにすばらしい救いをないがしろにしたら、処罰はもっと厳しいのですよ、ということです。

ヘブル人への手紙では、キリストの救いと神の恵みがいかにすばらしいかを語ると同時に、だからこそ、それを受け入れない時は、ものすごい損失となるということを訴えています。私たちは旧約時代は厳しいが、新約時代になったら優しくなったと言いますが、それは間違いです。自分が難病にかかっている、本当なら何千万円も払わなければいけない先端技術の手術を、誰かが一気に引き受けて、受けることができるようになった。けれども、それを受け取らなかった、というのと同じです。これほどまでに神が寛容になって、キリストを罪人の代わりに死なせることまでされて、これ以上の罪の赦しはありません。しかし、その完全な赦しを拒んだら、律法で裁かれる以上の厳しい裁きがあるということです。

ところで、ここで気づかないといけないのは、「ないがしろにした場合」と書いてあり、拒んだ場合と書いていないことです。ここで大事なのは、拒んでいるのではない、ということです。すでに信じているとされている者たちが、ないがしろにしているということです。聞いていることについて、しっかりと心に留めず、怠惰になっているのです。神の救いについて、そのすばらしさに目を積極的に目を留めず、「もうわかっている」とか、「救われたんだから、大丈夫」とか言って、ないがしろにしていると、それは大きな危険を伴いますよ、ということなのです。自分は主をあがめていると思ひ

ても、実は主を否定していることにつながりかねないからです。

2B 偉大な救い

「**こんなにすばらしい救い**」と言っていますね。ヘブル書の著者が、感嘆の思いを込めて、キリストの救いをこのように表現しているのです。

1C 「こんなに」

著者が、「こんなに」と感嘆しています。ちょうど主ご自身がニコデモに語られた時に、「ヨハネ 3:16 神は、**実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。**」と言われた時と同じです。とてつもない恵みを言い表しています。

2C 「すばらしい」

そして、「**すばらしい**」という言葉です。何をもってすばらしいのか？

第一に、偉大な神の救いだからです。「テトス 2:13 祝福された望み、すなわち大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの栄光ある現れを待ち望むように教えています。」私たちは、ヘブル 1 章で、いかにイエス・キリストが偉大な方であるかを見ました。世界では、対立が起こっています。周りの社会も問題だらけです。自分の生活でさえ、めちゃくちゃかもしれません。けれども、イエス様はその上におられます。その力強い御腕で、私たちに救ってくださいます。その根本である罪を十字架の上で根こそぎ、取り除いてくださったからです。たえず、たえず、この方がどこにおられるのかを思い出すのです。

第二に、偉大な犠牲、大きな犠牲です。「2:9b イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」神が人となられ、その肉体において、十字架の苦しみを味わわれました。そして、御子として、永遠の昔から父から引き離されたことがありませんでした。しかし、「神よ、神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」と、罪を背負われたことによって父から切り離される苦しみを味わわれたのです。この限りなく大きな犠牲を私たちは絶えず思い出すべきです。

第三に、大きな裁きです。先ほど話しましたように、救いをないがしろにした時の裁きは、モーセの律法の時よりも大きいのです。「ヘブル 10:26-29 もし私たちが、真理の知識を受けた後、進んで罪にとどまり続けるなら、もはや罪のきよめのためにはいけにえは残されておらず、ただ、さばきと、逆らう者たちを焼き尽くす激しい火を、恐れながら待つしかありません。モーセの律法を拒否する者は、二人または三人の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死ぬこととなります。まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。」完全な、最後の赦しを拒め

ば、残るは、大きな処罰なのです。

3C 「救い」

そこで、「救い」という言葉を考えてみましょう。どこからか救われるのです。例えば、自分が水難事故にあって、そこで救出されました。死を覚悟していた時に、救出に来た人がいました。その人のことをどれほど感謝することでしょうか。しかし、自分の生活に何か問題がありました。それを解決できる糸口を教えてください。良かった！前者と後者、どちらが救いですか？前者ですね。自分にはどうしようもなく、ただ死ぬしかない。しかし、一方的に救ってくれたのです。後者は、自分の生活や人生がもっと改善することを望んでいます。この後者の態度で、信仰生活を歩んでいたら、まさに救いをないがしろにしているのです。

教会の賛美の音楽が何か気に喰わないな。教会の人間関係が面倒臭い。奉仕を頼まれたら、何か困るな。あるいは、ここで自分のしていることが認められなかったら、やめておこう、などなど。自分の生活が改善すること、あるいは、自分が良い人になること。それは救いではないのです。

一つ、救いをないがしろにしなかった人々の話をします。かつて、ホロコーストの時に、ユダヤ人を約六千人救ったと言われる日本人の外交官、杉原千畝さんがいました。リトアニアの領事でしたが、日本の通過ビザを発行し続けたのです。しかし、戦後、彼は外務省の大きなリストラの中で、退職しました。それから息子の一人が死ぬなど、不幸が続きました。そして仕事も転々として、得意のロシア語を使ってモスクワの貿易会社で勤めていました。

この間、一時帰国していた時、イスラエル大使館から思わぬ電話がかかってきました。彼のかつて発行したビザによって救われたユダヤ難民でした。ユダヤ難民たちは、杉原さんを 20 年ぐらい探し続けていたのです。難民の多くはイスラエルに移住し、そのひとりには宗教大臣になっていました。杉原さんは再会を果たしました。イスラエル政府は、「諸国民の中の正義の人」の称号を杉原さんに、日本人として初めて贈ったのです。そして、外務省も彼の死後、遺族に謝罪しています。

自分たちの命を救ってくれた人は、どんなことをしても探し出し、この人に感謝と栄誉を与えたのです。これが、神の選ばれたユダヤ人がしたことです。神は救ってくださいました。このユダヤ人のように、大いなる救いに私たちは感謝し、しがみつき、どんなことがあっても、この方についていくと決めているのでしょうか？それだけ、偉大な救いをくださったのです。

ヨハネの弟子であった、使徒教父であるポリュカルポス(Polycarp)は、火炙りで処刑される直前、信仰を捨てるのを拒みました。「私は 86 年間、主に従ってきました。その間、ただ一度もわたしに悪くされず、恵みのみを与えられた。こんなに愛されている主を、どうして呪うことが出来ようか。」これほどの、偉大な救いなのです。